idea

ニュースレター「イデア」

2023. 5

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　一関修紅高等学校男子バレーボール部高橋昇禎監督・石川愛礼選手(後編)
3｜団体紹介｜　いちのせき語り部の会
5｜地域紹介｜　中新集落公民館(花泉)
7｜企業紹介｜　株式会社　山忠(室根)
8｜博識社のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴㉞　農村RMOと地域協働体
9｜センターの自由研究｜　末裔調査ファイルNo.4「千葉土佐」

今月の表紙

「資源・エネルギー循環型まちづくり」を目指す一関市では、木質チップ製造事業を重点プロジェクトの一つとして掲げています。当市にはチップ製造を行う事業所が6社あり、「エネルギー・木質資源・お金を市内で循環させる」一助を担っています(写真は「企業紹介」で紹介する室根町・株式会社 山忠の工場内。注文や在庫状況に応じて、丸太を"皮むき"してから各製材工程に進みます)。

idea ニュースレター「イデア」

発行　いちのせき市民活動センター　せんまやサテライト

〒021-0881　一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415
〒029-0803　一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736

ホームページ:https://www/center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp

おしらせ

イベント　「ふじさわ朝市2023」12月まで開催

「ふじさわ朝市の会」が主催する「ふじさわ朝市2023」を下記日程で開催します。「つなげる・つながる・楽しむ」がテーマの朝市で、生産者こだわりの商品が集結！季節に応じた野菜や果物、豆腐、コーヒー等のほか、雑貨の販売もあります。詳しくは下記まで。

開催日時:2023年4月から12月
第1日曜日　9時～12時
※今後の開催日は6月4日、7月2日、8月6日、9月3日、10月1日、11月5日、12月3日
場所:カンブン藤沢店 第3駐車場
(一関市藤沢町藤沢字早道)
販売品目:農産物、果物、加工品、花卉類、魚介類、手芸用品、特産品　等
問合:0191-63-5588(事務局・伊東)

情報　一関市磐清水市民センター(磐清水自治協議会)Facebookページ開設

千厩町磐清水の地域協働体「磐清水自治協議会」では、令和5年2月に指定管理を受託している「一関市磐清水市民センター」のFacebookページを開設し、市民センターだよりなどの情報を発信しています。また、同ページ内には、地域協働体「磐清水自治協議会」のグループを作り、磐清水自治協議会の活動や事業等についての情報も発信中。下記QRコードからもご覧いただけます。

◀磐清水市民センター
磐清水自治協議会▶

問合:0191-53-2850
(一関市磐清水市民センター内)

情報　『野草料理のかんたんレシピ』配布中

建部清庵の偉業を顕彰しながら、山野草などを使った地域経済の発展等を目的に活動している「清庵の里」では、山野草の様々な活用を研究してきた「清庵Cafe」で蓄積してきたレシピを『野草料理のかんたんレシピ』にまとめました(300部発行)。 清庵が著した「備荒草木図」の野草図とともに、身の回りに植生する野草を紹介しながら、料理の作り方を掲載しています。同冊子は、市内各所で配布しているほか、希望があればお渡しすることもできます。詳しくは下記まで。

冊子名:『野草料理のかんたんレシピ』
発行者:清庵の里・清庵Cafe
問合:080-6533-9328
(事務局・須藤)

募集　一関マジックの会 会員募集

会員のマジックの修練と、市内外のイベントでマジックを披露し、子ども大人も楽しんで心豊かになっていくことを目的に活動している「一関マジックの会」では、一緒に"マジックでまちを盛り上げる"仲間を募集しています。詳しくは下記までお問合せください。

定例活動日時:毎月第3土曜日
午後14時～16時
※変更になる場合あり
例会会場:一関市山目市民センター
活動内容:各種イベント出演、福祉施設などへの慰問等
会費:3,000円/年
問合:090-8178-2376
(事務局・小山)

募集　「イチコレ第4回コンテスト」エントリー募集中

今年で開催10周年を迎える 「イチコレ」こと「いちのせき市民モデルコレクション」。市民モデルが自由な表現を楽しむコンテスト部門「イチコレ第4回コンテスト」の参加者を募集中です。エントリーを検討中の方に向けた事前説明会(6月3日)も開催します。詳しくは下記までお問合せください。

開催日時:2023年9月24日(日)
10時30分～15時30分
(うち、コンテスト部門は1時間程度)
場所:なのはなプラザ2階　特設会場
募集組数:先着20組(年齢、性別、居住地、経験等不問)
問合:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

情報　いちのせき市民活動センター オリジナル(公式)「LINEスタンプ第2弾」

いちのせき市民活動センターでは、コミュニケーションアプリ「LINE」の「トーク」機能内で使用できるオリジナルスタンプ第2弾の販売を開始しました。LINE内のスタンプショップまたはLINE STOREから購入可能です。右記QRコードまたはURLから販売サイトへアクセスできます。詳しくは下記まで。

URL:https://store.line.me/stickershop/product/22501754/ja
※「LINE STORE」内で「里山自治会の仲間たち2」で検索しても表示されます。
問合:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「趣味が高じて……」

一関市萩荘の「農業商社 加賀長商店」。農業関連の商品が並ぶ店内に、なぜか昭和レトロなグッズが。昭和のアイテムが大好きな店主の奥様が、既製品の「ひらがなブロック」にキーホルダーのチェーンを付けたオリジナル雑貨(300円～)で、隠れた人気商品です。

旧町村別の人口動態等を共有します。

2023年**4月1日**付
(2023年３月31日現在住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	108587	-764
世帯数	46250	-79
出生数	43	9

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54135	-424	24426	-60
花泉	12026	-78	4705	-1
川崎	3242	-14	1279	0
千厩	9843	-72	4095	-14
大東	11950	-68	4913	3
東山	5898	-21	2280	4
室根	4377	-42	1775	-9
藤沢	7116	-45	2777	-2

169・170／108,587

高橋昇禎・石川愛礼

背番号１番が石川愛礼選手

【高橋昇禎監督】不来方高校、亜細亜大学で活躍後、東レアローズに入団。平成13年に現役を引退すると指導者に転身、亜細亜大学の監督を経て、平成19年より一関修紅高等学校男子バレーボール部の監督へ。

【石川愛礼選手（取材当時３年生）】奥州市江刺愛宕出身、金ヶ崎中学校卒業。令和元年度全日本中学生バレーボール選抜（男女各12人）にもセッターで選ばれた。身長178㎝。　※現在は日本体育大学に進学

第105回　一関修紅高等学校　男子バレーボール部　高橋昇禎監督　令和４年度キャプテン（セッター）　石川愛礼 選手　×　いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「日本一」を目指すための環境を整えて
～バレーボールをツールに【後編】～

「日本一」を明確な目標として掲げながら、バレーボールを武器にした大学進学にも多くの実績を残している一関修紅高等学校男子バレーボール部。県内各地からはもちろん、青森や福島など、他県からも生徒が集まり、一関市で高校生活を送っています。部活動と学校選択の関係性を考えていくと、地域スポーツの在り方を含め、我々市民のマインドリセットが求められています（２回シリーズの後編）。

小野寺　「強い高校でバレーをしたい」という県内外生徒の受け皿の一つに修紅が位置付けられ始めていることを実感したわけですが、部員は何人くらいいるんですか？

高橋　ここ数年は各学年10人を目指しています。基本は特待生ですが、一般生も入部はします。ただ、やはり温度差はあって、憧れだけじゃ続かないですね。

小野寺　キャプテンとして、温度差があるのは大変だった？

愛礼　普段から緊張感がないとダメなので、同じ熱量でやらせるのは大変でした。チームとして練習に緊張感がなくなることがないように気をつけました。

高橋　私たちは、必ず生徒たちに「修紅バレー部の求めるもの」としてビジョンとミッションを共有するんですが、「強い人づくり」っていうのが僕らのモットーなんです。強い人間を育てたい。要はバレーを通じて彼らを鍛えて、世の中で通用する人間にしようっていうのが大前提なんです。

小野寺　確かにバレーとか、何かしらの機会がないと、鍛えられない場面もありますよね。

高橋　良いツールなんです、スポーツは。挨拶をする意味とか、感謝の気持ちとか、３年かけて自然とできるようになる。愛礼なんて、春高[※1]でテレビや新聞のインタビューにかなり応えたので、本当に立派になりました。

小野寺　３年間で内面が何か変わったなと思いますか？

愛礼　謙虚になりました。

高橋　愛礼の場合、中学生の時に日の丸を背負っていたので、とがってたんですよ。何で俺が試合で使われないの、って。

小野寺　修紅に入学する時には出れない覚悟はしてなかった？

愛礼　「すぐ出てやる」って気持ちだったんですけど、通用しなくて、焦った時期もあります。

高橋　してやったりですよね（笑）

小野寺　戦略のもとですか？

高橋　計画的挫折です（笑）だってこれからも挫折があるじゃないですか。大学行っても、全日本レベルの選手ばかりの中で、乗り越えなきゃいけない。全日本入ったら終わりじゃないし、愛礼はオリンピックまで行かなきゃいけないし。

小野寺　仕事の世界でも挫折はつきものですからね。

高橋　今、学校は「挫折しないように、させないように……」という流れですけど、生きていくためには挫折の経験も必要。人間関係もそうで、強くなるためにはエゴを出しあって、それでもまとまるのが仲間。本当に心が許せるヤツはチームに２～３人で良いんですよ。そんな話もしているつもりです。

小野寺　そういう指導者の考え方も重要ですよね。

高橋　指導者自身がブラッシュアップしていかなくてはならないですよね。だから私たちも月１回はスタッフミーティングしますし、春高のあとの反省会には３日かけました。私は修紅バレー部から指導者も輩出したくて。指導者って、勝たなきゃいけないという思いが強すぎると、「ティーチング」になる傾向があるけど、本来は本人たちに考えさせたり選ばせる「コーチング」が必要だと感じています。

小野寺　これから部活動の地域移行が進む中で、指導者の人材確保や育成は急務ですよね。

高橋　ある意味で部活動の地域移行[※2]はチャンスでもあるんです。実は「修紅バレーボール教室」として中学生を対象にバレー教室を週に１回やってたんです。私や生徒たちが教えることで、中学生を伸ばすことができるし、修紅の雰囲気をわかった上で入部につながることもあるし。

小野寺　愛礼君もＶリーガー引退後は指導者を視野に？

愛礼　そうですね。地元に帰って来て修紅を強くしたいという気持ちはあります。

高橋　岩手はまだ部活含めスポーツはタダでするものだって思ってる世代が多くて。でも、今後は指導者にインセンティブが発生し、その対価として責任もって勉強しながら教えていくっていう機運にならないと指導者も伸びていきません。

小野寺　地域のスポーツ環境の在り方っていうのは、本当に問題提起しなきゃいけない時期だと思ってます。修紅バレー部は日本一を目指す環境にある中で、その背後にあるまち自体が変わっていかないと、修紅バレー部も伸びていかないし、一関の中学生にもそういう意識を持たせておかないと、せっかく市内に日本一を目指せる高校があっても、ついていけないわけで…。

高橋　我々も市民のみなさんに関心を持ってもらえるようにならなきゃならないし、関心持って欲しいですし。修紅だけで彼らを育てるわけじゃなく、一関市として彼らを育てていくっていうことを、一関市の誇りのように感じてもらえたら、この子たちが勝ったら嬉しいと思うんですよね。

小野寺　嬉しかったですよ。ましてや私立でありながら、ちゃんと校名に「一関」が入っているわけですから。

高橋　他県で活躍する子もいますけど、やっぱり高校くらいまでは地元・県内にいて欲しい。岩渕麗楽選手は練習環境は別だったにせよ、地元高校に在籍していたからあれだけ応援された。だから私はその環境を作りたい。愛礼は岩手に残ったから、絶対に応援されますよ。

小野寺　愛礼君、修紅のバレー部に入って良かった？

愛礼　はい、他の高校のようなエースバレーだったらやってても楽しくないんで。僕は３年間電車で通いましたが、一関で部員とご飯を食べたり、一関での高校生活も楽しみましたよ（笑）

※こぼれ話はＨＰにて！

一関修紅高等学校　男子バレー部
https://shuko-volleyball.hacca.jp/

※１　「第75回全日本バレーボール高等学校選手権大会」にて、ベスト８をかけた３回戦まで進出し、岩手県勢初のベスト16入りとなったことで、複数のメディアに取り上げられた（前編参照）。

※２　スポーツ庁が取り組む「運動部活動改革」の１つで、まずは休日の運動部活動について、令和５年度から７年度末までの３年間を目途に地域移行（部活動を学校単位から地域単位の取組にする）することが基本とされた。地域単位の取組みの受け皿として、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団、クラブチーム、民間事業者、フィットネスクラブ、大学等が想定され、それらの整備・体制づくりが求められている。

団体紹介

一関地域の昔ばなしを、方言で語り継ぐ

いちのせき語り部の会

いちのせき語り部の会

平成16年５月結成。毎月第２金曜日の定例研修会のほか、一関地域に伝わる昔ばなしの収集や当地域の方言への翻訳、小学校、老人福祉施設等を訪問するボランティア活動などにも取り組む（コロナ禍でボランティア活動は自粛中）。現在の会員は９名。

〒021-0064
一関市山目字沢内18-２　（代表・佐藤軍治）
TEL：0191-25-4125

写真：『おらほの昔かだり』出版記念事業での集合写真（平成23年）

消えゆく「昔ばなし」を後世に残すために

平成15年、中里公民館（当時）で開催された「民話・昔話語り部養成講座」。その受講者11人で結成したのが一関地域の方言による語り部活動を行っている「いちのせき語り部の会」です。

「当時私は公民館長を務めており、『この地域には多くの民話・伝説・昔ばなしが語り継がれてきたが、それが途絶えかけてきているのでは』と感じたのをきっかけに、公民館事業の中で同講座を企画しました」と語るのは、結成当時からの唯一の会員であり、同会５代目代表の佐藤軍治さんです。

自身も同講座を受講し、方言を交えながら表現豊かに語られる昔ばなしに魅了され、また、学んだことを地域に還元していきたいという思いから同会結成へと踏み切ったと言います。

多いときは15人ほどの会員がいた同会も、近年は会員の高齢化などで会員数が減少。佐藤さんは、「現在の会員の中には、家族の介護や運転免許証の返納で交通手段がないなどの理由でやむを得ず会の活動を休む人もいる。休んだ人には、その日の資料などを送付し、会の近況を共有しながら会員とのつながりが途絶えないようにしている」と、会員全員が集まれる日を心待ちにしている様子でした。

「収集」と「翻訳」そして「記録」

一関市中里市民センターを会場に、毎月第２金曜日に行われている定例研修会では、「昔ばなしの発表」というのがあります。これは、一関地域だけでなく他地域の昔ばなしを会員が順番に持ち寄って披露し、次回以降の研修会で、一関地域の方言に「翻訳」していくなど、会員の技量向上の一助になっているほか、新たな昔ばなしの開拓にもつなげています。

取材にお邪魔した日は、副代表の福西享子さんが「節分の鬼」、同副代表の永畠睦子さんが「すずらんのはなし」を披露。永畠さんは、「毎月、昔ばなしを持ち寄ることによって、自分の知らない昔ばなしを知ることができる。会員によって表現や話し方が異なり、その場でしか伝わらないニュアンスが楽しい」と話します。

同会では、平成23年に『いちのせきの伝説・昔話　おらほの昔かだり　第１集』、平成28年には「ご近所支え合い活動助成金」を活用し、同第２集を発刊しました。一関地域に伝わる昔ばなしを方言に翻訳し、各本には約25話ほどが収められています。

佐藤さんは、「本にすることにより、語り部とはまた違った方法で当地域の方言を知ることができる。第１集、第２集に載せきれなかった一関地域の伝説・昔ばなしがまだあるため、第３集もつくりたい」と今後の目標をにこやかに語ります。

心打つ　情緒豊かな表現

佐藤さんが「今でも印象に残っている」というのが、「骨寺村荘園交流館（若神子亭）」を訪れていた県外の大学生たちに語り部をした際の出来事です。

最初は何を言っているか分からず、つまらなさそうな様子で昔ばなしを聞いていた大学生たちでしたが、佐藤さんが話す方言と表現力で、徐々に昔ばなしに聞き入っていき、最後は笑顔をこぼしながら楽しんでいたのだとか！

佐藤さんは、「あの時の快感を今も忘れることができず、私にとっての原動力にもなっている。関東から訪れていた団体に語り部をした時には、悲しいお話ではないのに、泣きながら話に耳を傾ける人がいた。昔ばなしの底辺に流れる『人間のやさしさ』がその人の心に届いたんだろう」と、昔ばなしが心に響いた瞬間を振り返ります。

図書館や小学校、地域のサロン、老人福祉施設等に行き、語り部の活動を活発に行っていた同会でしたが、コロナ禍では自粛や中止が相次ぎました。

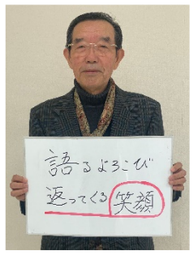
また、長年交流を持ち続けている「花泉語り部の会『いずみの里』」との研修交流会や、昔ばなしや民話などが発祥された地を訪問する「歴史探訪の旅」も令和1～4年度は中止に。

佐藤さんは、「少しずつコロナ禍前の生活に戻りつつある。声がかかれば、どこにでも語り部に行きますし、他地域の語り部の団体とも交流を持っていきたい」と今後への意欲を見せます。

一関地域に伝わる民話・伝説・昔ばなしを後世に残したいという思いから結成した同会は、結成から19年目を迎えます。語り部を通し、懐かしさや楽しさとともに、先人の暮らしや歴史などを伝えてきた同会は、これからも一話一話を大切に語っていきながら、「地域の宝（＝お話）」を語り継いでいきます。

Q.あなたにとって語り部とは？

代表

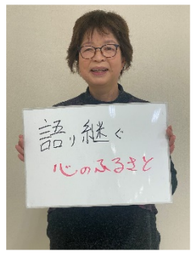


佐藤軍治（さとう　ぐんじ）さん

「聞き上手になって。面白くないときでも手を叩いて」という決まり文句で前置きをしてから語り部を始めるのが佐藤さんの流儀です。

A. 語るよろこび　返ってくる笑顔

副代表

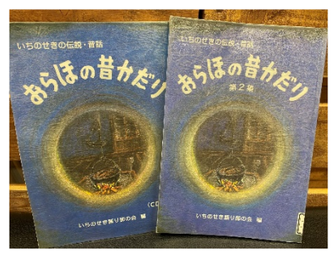


永畠睦子（ながはた　むつこ）さん

平成29年に同会へ入会。自分の住む地域の方言が好きで、「そのままでいたい」と話します。同会にとって頼れる存在です。

A. 語り継ぐ　心のふるさと

- Photo gallery -



『おらほの昔かだり』

一関地域の伝説や昔ばなしなどを方言にして本にまとめました。本は市立図書館で借りることができます。

本の出版を記念して

出版記念事業として、市内外で活動する語り部団体を集め、各団体の語り部を聞く機会を設けました（平成23年の様子）。

毎月開催の定例研修会

会員が輪番で持ち寄る昔ばなしを楽しみながら、技量向上につなげています。研修会後のお茶会も楽しみの一つです。

ご依頼、承ります！

これまで多くの場所で語り部を披露してきた同会。写真は平成29年に「シニア・フェスタ２０１６」に参加した際の様子。

地域紹介

若い世代を巻き込み「正のスパイラル」を

花泉　中新集落公民館

左の写真：老人クラブから集落公民館に事業継承された「しめ縄づくり」の様子（令和元年）。

中新集落公民館（涌津）

行政区は「涌津７区」。107世帯、約350人が暮らす（９班体制）。集落内には「紫舘（中世期における地方豪族・岩渕氏の居城で、1300年代から290年間（10代）に渡り流郷の中心的な防塞だった）」の跡地を整備した「紫舘公園」や磐乃井酒造などが立地する。

組織を「整理」し、「人材の取り合い」をなくす

通称「ぎっくらカーブ」を擁する「新町」と、古くは宿場町であった「中町」とで構成される「中新集落」。平成28年度までは「中新町内会」が集落の自治会的な位置づけで組織され、当該集落のトップは町内会長でした。

昭和50年代、旧花泉町では社会教育の末端組織として各集落に「集落（部落）公民館」の設置（組織化／建設）を推進し、中新集落においても、町内会とは別に「中新集落公民館」を組織しました。

そのため、地域づくり活動を行う組織が二重に存在し、町内会と集落公民館それぞれに役を立てる状況が長年続いていました。

かつては町内会でも複数の事業をもっていましたが、様々な要因で事業数も減り、新年会とお花見を残すのみ。年々参加者も減少する中で、「組織が二重に必要なのか」という疑問の声が出始めるようになります。

そこで平成29年、町内会を解散し、地域づくり活動は集落公民館に一本化することを決断。町内会の残金は特別会計として集落公民館に移譲し、集落公民館長をトップとした新しい中新集落が動き出しました。

「仕組み化」ではなく、「流れづくり」という改革

当時、集落公民館長を務めていた小林賢さん（群馬県出身）は、妻の故郷である涌津に移住した翌年に衛生組合長に、２年後に集落公民館長を託されました（以後４期）。

最初の２年は前例踏襲で事業をこなしていた小林さんですが、「涌津まちづくり協議会」の事業などで他集落と交流する中で「活気のある集落と自分たちの集落の何が違うのかを考えるようになった」のだとか。着目したのが「市民センター活動推進員」「スポーツ推進員」など、集落に推薦を依頼される役職。若い世代を当該職に就けることが多く、同集落でも若い世代に依頼はしていたものの「元気な集落ではこうした役職の若い人たちの集落事業への巻き込み方が上手いことに気づいた」と言います。

そこで、これまでは役員中心に行っていた地区民運動会等の選手選考会に同役職などの「現役世代」を投入。すると、従来よりも若い選手が増え、行事後の「反省会」にも変化が。選手として参加した若い世代も反省会に加わるようになったため、子連れで参加する世帯がいたり、反省会での交流によって、さらなる地域人材の把握につながり始めました。

「若い人たちも様々な活動をしているが、我々中高年世代にはその情報が伝わってこない。若い人たちを知らないために、取り込めていなかっただけ」と、小林さん。

令和４年度集落公民館長の岩渕修さんは「自分もそうでしたが、ＰＴＡを引退すると、次の世代のことがわからなくなる。若い世代を『回す』ことができると、飲食の場に参加する人も増え、良いスパイラルになる」と、振り返り、令和５年度から集落公民館長になった鈴木郁也さんは「飲食が伴う場で『そろそろだぞ』と声をかけておくことは大事。私も10年以上前から言われ続けてきた」と、笑顔を見せます。

若い世代からの「集まる場所が欲しい」に応えて

東日本大震災によって、それまで用していた集会所が使用できなくなり、集会所を持たずに活動を続けていた集落。それ以前から老朽化した集会の新設を求める声が度々出ていたものの、賛成者が少なく、具体化することはありませんでした。しかし、若いが若い人を呼ぶ「好循環」が生じるようになったことで、「自分たちのタミングで集まることができる場所がしい」という声が増えてきました。

令和４年度の総会で「公民館建設査委員会」の発足が可決されると、民館役員のほか、区長やＰＴＡなど検討を重ねます。令和５年２月には民アンケートを実施し、回答者の７が「必要」と回答。令和５年度総会「公民館建設委員会」の設置に了承得たので、具体的な検討に入ります。

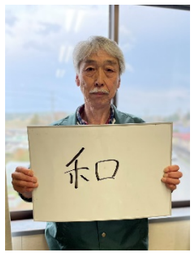
「先のことを考え、後世に負の遺を残すのではという声もあるが、逆寄付する準備をしているという人もる。飲食の場を大事にしていくためは、気兼ねなく使える場所は必要」役員経験者たちは、口を揃えます。

「飲みにケーション」が功を奏し、と、にいに産をで割住で公調欲イよ人との所同り、使

当面は役員交代も円滑に進む見通しが立っているという同集落。「公民館が完成したら新年会をやろう」を合言葉に、中新集落は時代に逆行した盛り上がりを見せていきそうです。

Q.集落の自慢は何ですか？

集落公民館長

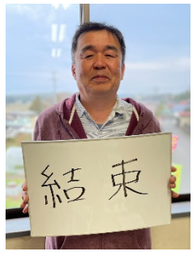


A.和

すずき　いくや
鈴木郁也さん

１期１年目。副会長を１期経て、令和５年４月に着任。同集落内で営む「鈴木水道」の２代目。「この集落で育った我々世代は仲が良い」と微笑みます。

前集落公民館長

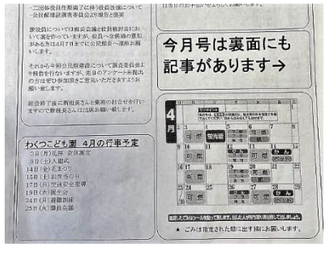


A.結束

いわぶち　おさむ
岩渕修さん

若い頃から町内会・集落公民館どちらの役も複数かつ長年従事。集落公民館長は１期でバトンを渡し、今後のバトンリレーを円滑に進める基礎を作りました。

- Photo gallery -



毎月発行の広報紙

役員の中で担当を決めて作成。ひな形は決まっていて、その月のゴミ収集カレンダーや、「わくつこども園」の予定も掲載。

若いパワーで優勝！

令和４年度、３年ぶりに開催された「涌津地区民大運動会」で優勝した同集落。過去には３連覇記録もあり、今後に期待！

担当は「焼きそば」

涌津まちづくり協議会主催の夏まつりでは、各集落が出店を担当。同集落は焼きそば屋台がお決まりです（写真は令和元年）。

集落代表は子どもたち

令和４年度冬期スポーツ大会（一関市涌津市民センター主催）で行われたボッチャ。同集落は子どもたち含む２チームで参加！

企業紹介

室根　株式会社　山忠

昭和36年設立。昭和24年頃、炭焼きを生業としていた現代表取締役会長小野寺義直さんの父(初代・小野寺忠一さん)が、薪炭の需要減少と国産木材の需要増加を受け、昭和30年代後半から薪炭の販売と合わせて建築用材も取り扱うように(旧東磐井郡、本吉町、歌津町の山林を保有)。昭和41年、現住所の道路拡張工事に伴い事務所と工場を構え、チップ製造と製材(建築用材・パレット※用材)に業態を切り替え、平成４年には義直さんが二代目代表取締役に、令和４年には息子の友義さんが三代目代表取締役に就任。山林も保有しながら、必要な業種に安定した資材供給を行っています。

※輸送・物流用に使う、すのこ状または、板状の台。物品の保管用に需要が高まっている。

いつの時代も「木」が暮らしを支え、未来を創る

時代の変化と森林の恵

森林資源豊富な一関市室根町津谷川地区は、森林の少ない宮城県沿岸部に近く、燃料としての薪炭の供給を担ってきました。株式会社山忠を創業した小野寺忠一さん(故人)も炭焼きを生業とし、沿岸部への行商をしていましたが、薪炭の需要が減り始めると、徐々に建築用材の製材に切り替え、バブル期へと突入します。

「当時は当地区にも大工さんが15人程いて、住宅建築で木材需要が多かった。今のお得意先は建築業者(法人)だが、だいぶ少なくなったね。安価な輸入木材に頼り、国産木材の値段は当初の半値程度(ウッドショックの影響でここ数年は回復)。地元の製材業者も少なくなった」と現状を語るのは、代表取締役会長で二代目の小野寺義直さんです。

現在、日本の住宅メーカーが取り扱う木材の約7割が輸入木材。戦時中の製炭需要や戦後の住宅需要に伴う乱伐により、国産材が減少したこと(＝国産材の高騰)も影響しているとか。「木材(建築用材)は植林してから市場に出るまで50年以上かかる。国内の森林が回復する前に林業従事者が減少し、国内の林業は衰退してきた」と、林業の置かれた厳しい状況に触れながら、義直さんは「炭焼き、製材業、そして現在も需要が変化しつつある中で、心配なことは50年後の山だね」と表情を曇らせます。

「植樹をしたら、約15年はしっかり手をかけないと、太い丸太にはならない。下刈りや除伐等、山林の整備をしないとツタや草に木が負けてしまう。これまではできていたことでも、これからは人・働き手がいない。企業単独だけではなく、様々な人の力を借りないと、今のこの時代では力も予算も足りないんだよ。豊かな森を継承していくために、そして企業として安定した供給ができるよう考える時期がきた」と語り、「50年後も空気がきれいだといいな」と世代交代したばかりの友義さん(現代表取締役)に希望を託します。

持続可能な森林経営の一助に

「チップ」の製造と「木製パレット」用の資材供給も行っている同社。チップはバイオマス燃料のほか、大手製紙企業とも契約しており(紙の原料)、1日60～70立方ｍを製造します。東日本大震災以降需要が高まった木製パレットは、東北各地から注文が入っており、年間を通して加工業者に材料を供給しています。

なお、自社で保有する山林以外にも、公有林や民有林の立木も購入しており、民有林の場合は、立木の状態を1本ずつ調査して査定。工場での作業以外にも、そうした現場での知識を得ることができるため、同社で木材に関する知識や製材の技術を学んだ後、独立して林業等に携わる人も多いのだとか。

友義さんは「家業への興味は薄かったが、父の背中を見て育ち『いずれは継ぐのだろうな』という気持ちはあった。地域の資源である森林の保持や人材の育成にも力を入れていきたい」と、次なる「背中」となっていきます。

1 各材質の説明をする、代表取締役会長の小野寺義直さん

2 チップは25ｔトラックで一日約4台分製造されます。

3 自然乾燥中の建築用材。

DATA
【本社】〒029-1211
一関市室根町津谷川
字下川原７-６
TEL 0191-65-2311
FAX 0191-65-2412

今月のテーマ

地域運営の落とし穴㉞

農村RMOと地域協働体

第50話

「農村RMO」と「地域協働体」は‘上手に連携’すべし

「農村RMO」と「地域協働体(＝地域運営組織＝RMO)」に関しては、正しい理解ができていない状況では、「似たような組織をいくつ作るんだ！」という声が聞こえてくるのが目に見えています。そこで、第48話・49話に引き続き、農村RMOの取り扱いについて検討していきます。

農村RMOと地域協働体をそれぞれで設立すると、確かに二重構造になってしまいます。まして、高齢化や人口減少により担い手が少ないという現実を抱えているわけですから、似たような組織を、行政の都合(縦割り)で新たに設立する状況は避けたいところです。48話で触れているように、どちらも**「集落規模の縮小」という課題に対して、「集落規模を拡大し、地域内の各種団体や住民と連携することで、支え合いの仕組みを構築していく」ということが目的**であり、‘組織の設立’が目的ではありません。**これからの時代の「支え合いの仕組み」の構築**です。形式上、‘組織’になってしまいますが、言い換えるなら**「円卓会議をする場(組織)」**でしょう。

一関市では、市民センター単位で**「地域協働体**(地域運営組織)**」**を組織し、「地域づくり計画」に基づいて、地域振興や支え合いに通じる活動、産業の活性化などに取り組んでいます。地域協働体によっては、**部会制**を取っており、例えば産業に関する部会は、新たな産業創出を目指したり、農業や林業、獣害に関することなど、**‘農村集落機能の維持’を目的とした事業(円卓会議)**を行っています。そのため、**農業関係団体・者が部会の構成員になっている**ことが多く、**農村RMOの原型ができている**と言えます。部会がない地域協働体でも、「地域の円卓会議の議題」として農業に関することを取り上げる(議論する)ことは、農村RMOの原型に近いです。

このように、既にある地域協働体に、**農村RMOの‘機能’を追加**することで、二重構造を生まず、**地域の課題として農業や農村振興に関する共有や議論をすることができます。**

ここで注意したいことは、**‘農家’‘非農家’**です。「なぜ非農家が農家の支えをしなければいけないのか」と思う人もいると思いますが、**農村RMOは‘農業支援’ではなく、‘農村集落の暮らしに対する取り組み’を取り扱います**。つまり、収入に関係する‘農業’だけではなく、**集落の環境整備や高齢者支援などを「農家非農家関係なく、みんなでやっていきましょう」**ということです。「多面的機能支払交付金」に取り組んでいる集落(組織)の場合、その‘地域拡大版’と置き換えると、イメージしやすいかと思います。

地域協働体では、高齢者福祉や安心安全に関することなどに既に取り組んでいます。新たに農村RMOを設立し、同様の取り組みを行うと、地域住民にとっては‘負担の上乗せ’であり、無駄な動きにもなりかねないため、**「地域協働体に農村RMOの機能を組み込む」ことが理想**です。

昨年８月に農村RMOに関する研修会を開催した際に、「地域協働体に農村RMOの機能を追加すると、中山間地域等直接支払交付金や多面的機能支払交付金のお金も地域協働体のものになってしまうのか？」という質問をいただきました。**機能を共有し、‘中山間や多面的でできないことを地域協働体が補完する’という考え方**なので、事業自体は別ものです(環境整備等の従来の事業はそのまま)。ですから、環境整備等における人件費など、中山間や多面的の従来の事業費(交付金)を地域協働体に入れる必要はありません。農村RMOとして事業をするならば、農村RMO事業費や地域協働体の事業費をはじめ、各種補助金や助成金が活用できます。

農村ＲＭＯのイメージ

農家・非農家が一体となり、農村集落機能や地域コミュニティの維持に取り組む

また、中山間や多面的も事務局の担い手が課題となっていますが、‘機能の共有と補完’という視点から考えれば、事務能力がある人に中山間や多面的の事務局を手伝ってもらうことも可能になると考えられます。**狭域の集落では人材不足でも、広域で見ると一定量の人口が確保され、その中には様々なプレーヤーがいる**からです。

人口減少時代に備えたRMO(地域運営組織)は、全国各地で増加傾向にありますが、文化活動や高齢者の生活支援を目的としたものが多いように感じています。「農業」「農村」「農地」に関する活動は、一関の地域協働体を見ても事例は少ないです。このままでは中山間地域の農地や農業、住民の生活といった「農村集落機能」の衰退が、ますます進行してしまう恐れがあります。**農地や農業の課題もみんなで共有し、地域協働体と農村RMOの機能を上手に使いながら、集落の機能維持に努めていきましょう。**

地域の‘気になること’をセンタースタッフが独自に調査！

ミッション76 末裔調査ファイルNo.4 「千葉土佐」

一関市藤沢町大籠の製鉄を興隆したとして地域で語り継がれる「千松兄弟」。この千松兄弟を招聘し、大籠周辺を伊達藩きっての鉄の産地に発展させたのが「千葉土佐(初代/二代目)」です。当地域の偉人そのものの功績もさることながら、その「末裔」を調査し、会いに行くシリーズ「末裔調査ファイル」。第４弾は大籠で「炯屋(どうや／北上山地周辺地域での砂鉄精錬業者もしくは製鉄する場の呼び名。全国的に言う「たたら」)」を展開した「千葉土佐」にスポットをあてます。　※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■当地域における炯屋の歴史

山林が豊富で、砂鉄の埋蔵地にも近接していた大籠では、**慶長年間(1596～1615)に「炯屋」が産業として興隆**し、明治30年頃まで炯屋が存在していました。

大籠での炯屋興隆から遡ること約40年(永禄年間)、**葛西家家臣の千葉土佐(初代)**は、佐藤但馬とともに**備中の国**(現在でいう岡山県西部)に赴き、**「布留大八郎・小八郎(後の千松兄弟)」**を**宮城県の砂鉄地帯(桃生郡／現在の石巻市・東松島市付近)に招聘**。戦国時代であり、武器を製造するための製鉄需要があったとされます。

桃生郡では４カ村で炯屋が稼働しますが、森合城の落城(左頁参照)や、さらなる燃料や材料などを求め、**桃生郡から狼河原(現在の登米市東和町米川)に炯屋を移し**、さらに**布留兄弟は大籠村の千松沢に移住**します(文禄元年(1592)という説あり)。その後、慶長(1596～)に入ると、**大籠村の「清水山**(左利沢・早坂周辺)**・奈良原山**(現在地不明)**・大穴**(杉松・大籠周辺)**」の３か所に炯屋が開かれ**、この時の炯屋経営を行った８人が**「炯屋八人衆」**と呼ばれます。

今回スポットをあてる「千葉土佐」はこの八人衆の一人ですが、**布留兄弟(以下、千松兄弟)を招聘したのは初代千葉土佐、大籠で炯屋の経営を行った**(鉄吹方工として功績を残したという説もあり)**のは二代目(息子)の千葉土佐**です。

■武器から農具へ

二代目千葉土佐が大籠で炯屋を経営し始めた頃は、豊臣秀吉の天下であり、大籠からも**大阪城の築城や豊臣政権が使用する軍用鉄・鉄砲鉄を供給**していたと考えられます。伊達政宗が当地域を領有するようになってからは、**岩出山城や仙台城、江戸城の築城等にも供給**していたとか。この頃には**炯屋も東磐井郡・西磐井郡・本吉郡・登米郡・気仙郡など、各地に増設**されます。

次第に**武器の需要よりも農具の需要が増加**(慶長以前には仙台藩領内には鍬鍛冶がなく、他領から輸入していたため、高価で農民には負担が大きかった)すると、二代目千葉土佐は、**鍬鍛冶の技術を習得するため、首藤(須藤)相模と共に京都へ**上るのです。

鍬鍛冶技術を習得し、大籠に戻ると、**「菊一」「菊上」**と記した鍬の製造・販売を始めます。農民が鍬を入手しやすくなっただけでなく、**仙台藩の特産品**ともなり、鍬鍛冶を行うために炯屋を開く地域が続出(津谷川村(室根町)村民18名が元和３年(1617)に鍬鍛冶生産を申請するなど)。

その後も社会の安定とともに、用水路や溜池の整備、開田が進み、鉄製農具は大きな役割を果たします。

こうして、当地域における製鉄は、**初代千葉土佐がきっかけを作り、二代目千葉土佐が発展させた**のです。

※あくまでも様々な説からの推測です。

「大籠キリシタン資料館」に展示されている鍬(藤沢町大籠・佐藤信一氏蔵)。二代目千葉土佐らの鍬鍛冶技術により大籠で造られた鍬には「菊一」「菊上」の銘が刻まれている。この鍬には「菊一」の銘が。

同じく「大籠キリシタン資料館」に展示されている「千松大八郎」をイメージした像。キリシタンだった「千松兄弟」は、製鉄技術(南蛮流製鉄法や天秤流)とともに、キリスト教も布教した。なお、千松兄弟については、実在していなかった(別の人物に架空の人物を当てはめた)のではないかという説もある。

実は「謎」だらけ＝歴史ロマン満載！

千葉土佐とその子孫のヒストリー

右頁では初代及び二代目千葉土佐による製鉄に関する功績のみを紹介しましたが、実は**千葉土佐がそもそも何者で、どこの出身者なのかは定かではありません**。藤沢町史などでは、初代千葉土佐を**「葛西晴信の家臣で、宮城県登米郡東和町の森合城主」**としていますが、**「長坂(東山町長坂)から狼河原に移り住んだ浪人」**という説なども。以下では、森合城主として、**城主時代に炯屋を開いた**という説で、千葉土佐とその子孫に関する歴史を整理してみました。

西暦	元号	千葉土佐(千葉家)の歴史　※森合城主として炯屋を開いた説を基に整理
1543年	天文12年	初代千葉土佐誕生(藤沢町史等の記載を基に推測)　※永正年間の生まれの説もある
1558	永禄１	森合城主在任中に布留兄弟を招聘、炯屋を桃生郡に建設(葛西晴信の命を受けてとも言われている)。従事者は土佐・伊賀・肥前・飛騨・勘左衛門・駒吉・越中の７人。※製鉄を始めた時期は明確ではなく、布留兄弟が招聘される前から在来の手法で行っていたという話もある。
1584	天正12	隣村の米谷城主・西郡城主に森合城を攻め取られ、６月に落城。歌津に逃れた後に狼河原(東和町米川)に移り、製鉄を始めた。以降、２代目土佐と炯屋経営に専念する。※初代は41才、２代目は14才。
1590	天正18	奥州仕置きにより葛西家没落。※初代土佐もこの年に死去(供養碑からの推測)しているが因果関係不明。
1592	文禄元年	布留兄弟が製鉄に適した場所を探し、大籠村の千松沢に定住(千松兄弟の誕生)。
慶長年間(初頭)		狼河原村の４カ所に炯屋を開いたとともに大籠村の３か所にも炯屋を開設(大籠村の左沢屋敷対馬(但馬の息子)が製鉄技法を伝授)。土佐らに加わり、炯屋八人衆の誕生。
1598	慶長３	岩出山城に荒鉄1600貫、大阪城に軍用鉄・鉄砲鉄計2400貫を送る。この年から、生産された荒鉄の出荷状況等の記録が残る(慶長～明治)。
慶長年間(後期)		首藤(須藤)相模と土佐が京都へ。鍬造りの許可を授かる。大籠へ戻り、仙台領内にて鍬造り開始。
寛永年間		２代目土佐一家が「月山屋敷(東和町米川)」から現在の「検断屋敷(藤沢町大籠)」に移り住む。
1639	寛永16	キリシタン弾圧により大籠村のキリシタン300余人が殉教。　※寛永17年も合わせて
1641	寛永18	２代目千葉土佐死去。　※２代目土佐の墓碑から推測
1662	寛文２	４代目利左衛門が「御山守」に任命される。
1834	天保５	７代目市左衛門が「大天秤流炯屋」の名を認めるよう御山下代佐藤善十郎・及川与治助に懇願。
1871	明治４	荒鉄5,000貫を生産。　※今回の調査で記録が確認できたのはこの年まで
1979	昭和54	東上沢(東和町米川)沼倉専助氏旧墓地で初代土佐の供養碑を発見。

末裔ファイル4

大籠で製鉄を興隆した炯屋八人衆の一人　千葉土佐 ▶▶▶ ２代目千葉土佐の大籠の住まい「検断屋敷」の14代目当主　千葉 清さん

千葉 清(ちば きよし)
昭和32年生まれ。旧藤沢高校卒業後、北海道で酪農の研修(２年)を経て帰郷、家業の酪農を継ぐ。以後40年に渡って７町歩の牧草地で酪農を営むも、東日本大震災での被災等を機に酪農をやめ、現在は藤沢町内の企業に勤務している。

２代目千葉土佐が大籠に移り住んだとされるのが**寛永年間(1624-44)**。屋号が**「検断屋敷」**であることから、村役人などであったことが推測できます。

この「検断屋敷」に現在も暮らしているのが千葉清さんです。千葉家の法名碑や文献、ヒアリングなどを元に推測すると、**初代千葉土佐から数えると15代目、「検断屋敷」としては14代目の当主**と考えられます(家系図などは残っていない)。家屋そのものも、清さんの幼少期に「築300年くらい」と聞いたことがあるそうで、当時から大きく変わっていない可能性も(平成16年にトタン屋根をかぶせている)。

２代目土佐以降、製鉄に関係していた先祖がいるのかどうかは千葉家にも伝わっていないと言い、清さんの祖父・哲夫さんは農業を、父・満男さんは酪農業を営んでいました。しかし、**千葉家に残る古文書の中には、製鉄炉の図や、製鉄に使う工具の図、製鉄用炭窯の図等が残されており、製鉄に関連した先祖がいた名残**を感じさせます。

◆「千葉土佐の末裔」という認識をもったきっかけや時期は？

―　高校生あたり。学者のような人の取材(調査)を祖父が受けていて、「次の次の代は俺だろうなぁ。この家を継がなければ」という意識が芽生えた。

◆末裔としてのエピソードがあれば……

―　藤沢町民劇(現・一関藤沢市民劇場実行委員会)**の第1作が千葉土佐に通じる作品で、脚本家から「お前(の先祖)のことやっているから見さこない？」と言われ、仙台での上演時に見に行った。また、二男は、高校生の時に「千葉土佐の末裔だ」と、同級生に言われたことがあるらしい。父や自分の代になってからは歴史関係の客は減った。**

◆千葉家の今後について

―　長男(市内在住)、**二男**(宮城県在住)**と千葉土佐の話をすることはないし、聞かれることもないが、いずれ本人にその気があれば自分から聞くし、学ぶだろう。欲を持たず、「足るを知る」を心がけている。**

千葉家に残る古文書のうち、製鉄炉の図面と思われるもの。右ページには千松兄弟が最初に伝えた技法とされる「二神陽合吹」の表記と図面が、左ページは「備前流三神陽合吹」の図と推測。▶

本誌面に掲載しきれなかった情報や画像等を当センターホームページにて公開しています。

＜協力＞　大籠キリシタン殉教公園(大籠キリシタン資料館)職員のみなさま　他
＜参考文献＞　誌面では割愛させていただき、当センターホームページに掲載します